

海龍王寺旧境内の調査

—第 456 次

1 はじめに

個人住宅の建設にともなう調査で、調査地は海龍王寺旧境内の東北隅にあたる。宅地造成の直前まで調査区の北側には、北に低い段差があった。調査面積は約22㎡(南北3.6m、東西6m)で、調査期間は2009年5月11日～18日である。

2 周辺の調査成果

海龍王寺境内ではすでに発掘調査がおこなわれ、中金堂や西金堂などの伽藍があきらかになっている(奈良県文化財保存事務所『重要文化財海龍王寺西金堂・経蔵修理報告書』1967)。また周辺では、本調査区の北約30mに位置する第164-24次調査で、一条条間路北側溝を(『S60平城概報』)、調査区の西に位置する第95-2次調査で同路北側溝・南側溝および南側築地を検出している(『S50平城概報』)。また第314-12次調査でも同路南側溝を確認している(『紀要2001』)。今回の調査は一条条間路南側溝の南で、かつ東二坊大路西側溝の西にあたり、海龍王寺東北隅の様相があきらかになることが期待された。



図196 第456次調査区位置図 1:2000

3 基本層序と検出遺構

層序はおおむね上から順に、厚さ10～20cmの盛土(図199の①層)、10cmの旧表土(②層)、30～40cmの明褐色砂質土や明褐色砂質土混じり灰褐色シルトの整地層(③層)、10cmの灰褐色シルトの整地層(④層)があり、灰褐色砂礫土の地山(⑤層)にいたる。

SK9440 調査区南側全体で検出した深さ約30cmの土坑。二段に分けて掘られている。東・西・南は調査区外に続く。10世紀の土器を含む。

SK9441 調査区西北部で検出した土坑。南北0.6m、東西2.5m分を検出し、南肩以外は調査区外に続く。瓦と炭、平城宮土器ⅡあるいはⅢの土器を含む。

SK9442 SK9441を掘削したのち検出した浅い土坑。南北0.4m、東西1.4m分を検出し調査区外の北西に広がる。底はすり鉢状に落ち込んでおり、深さは約20cm。土師器高杯(平城宮土器Ⅱ～Ⅲ)や後述の7世紀の軒瓦が出土した。(浅野啓介)

表13 第456次調査 出土瓦磚類集計表

型式	軒丸瓦		軒平瓦		道具瓦		
	種	点数	型式	点数	種類	点数	
6138	F	1	重弧文	2	面戸瓦	3	
6282	Ba	2	近世前半	2	用途不明	1	
巴		2	近世後半	2			
型式不明(白鳳)		1	近世	2			
型式不明(奈良)		1					
軒丸瓦計		7	軒平瓦計		8	道具瓦計	4
	丸瓦		平瓦	磚	凝灰岩	レンガ	
重量	26.087kg		93.727kg	0.454kg	0	0	
点数	165		838	2	0	0	

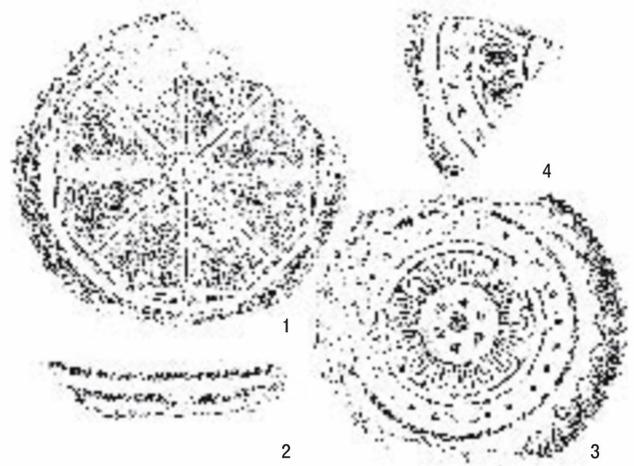


図197 第456次調査出土軒瓦 1:4

4 出土遺物

土器 上記の他、③層から平城宮土器Ⅱ～Ⅲの杯蓋が出土した。

瓦磚類 本調査区で出土した瓦磚類を表13・図197に示した。1は奥山廃寺式の素弁8弁で、7世紀前半の軒丸瓦である。この型式は海龍王寺の寺域からははじめての出土である。同範の瓦は左京八条三坊十五坪（姫寺廃寺）から出土しており、横井廃寺跡からも採集されている。本調査区の出土品は花卉の中央に稜線が通るため、横井廃寺の範を彫り直した段階の瓦である。2は重弧文軒平瓦で7世紀後半である。1および2の一点はSK9442から出土し、もう一点は③層から出土した。3の6282Baは法華寺前身建物に使用された軒丸瓦。4の6138Fは法華寺阿弥陀浄土院の所用瓦である。3は④層、4は②層から出土した。
(今井晃樹)

した上で、奈良時代中頃にかさ上げ（④・③層）がおこなわれたと考えられる。④層からは法華寺前身建物に使用された軒丸瓦が出土しており、この調査区が同建物と関連があったことを物語っている。他に法華寺阿弥陀浄土院所用瓦も出土しており、海龍王寺（隅寺）が法華寺の造営と一体となって改修されていたと考えるひとつの資料になるだろう。
(浅野)

5 おわりに

調査区の付近は全体的に見て北から南に傾斜しているが、この調査区の中では、地山と考えられる⑤層が南に向かって高まっていることから、もともと調査区から南に高まりがあったと考えられる。そこに何らかの施設が建てられたことにより、SK9442の遺物が奈良時代初頭に捨てられた。白鳳の瓦を含むことから、奈良時代以前の施設に関連するものと考えられる。その後傾斜をなら

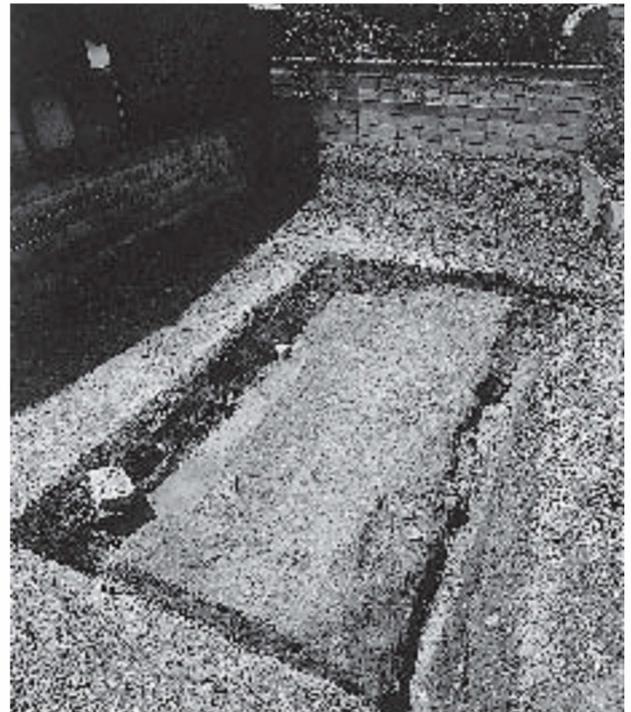


図198 第456次調査区全景（北東から）

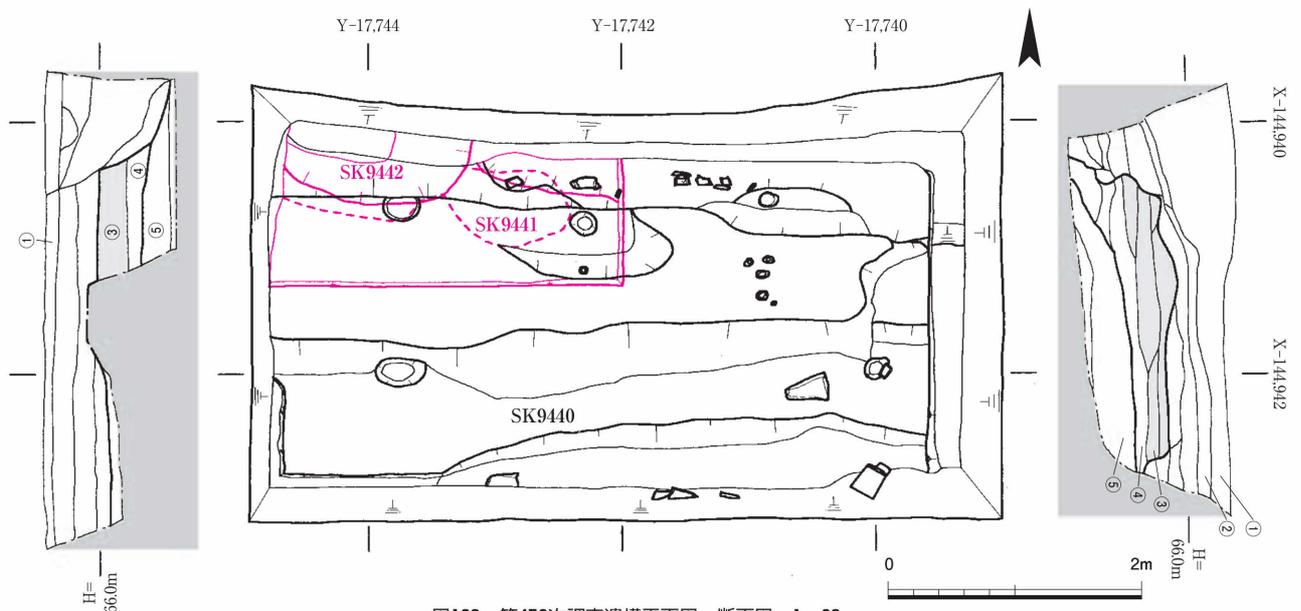


図199 第456次調査遺構平面図・断面図 1:60